

# 「伊豆 歴史散歩」

## ～南伊豆・西伊豆編～

静岡県立中央図書館  
歴史文化情報センター

## 「伊豆 歴史散歩」 ～南伊豆・西伊豆編～

静岡県立中央図書館 歴史文化情報センターのホームページにお越しいただきまして、誠にありがとうございます。

歴史文化情報センターでは、『静岡県史』で収集した所蔵資料や市町村史などを使い、「伊豆 歴史散歩」を作成しました。

今回は、東伊豆編に続き、南伊豆・西伊豆地域の歴史ガイドです。

河津町・下田市・南伊豆町・松崎町・西伊豆町・旧土肥町(現伊豆市)・旧戸田村(現沼津市)に残る歴史と名所旧跡を、スライドにてご案内いたします。

また、今回は伊豆半島ジオパークに関する資料も紹介しました。

スライドには、関係する参考URLを表示しましたので、そこからアクセス方法や施設等の詳しい情報を取得して下さい。

「伊豆 歴史散歩」から、伊豆の新たな発見があれば幸いです。

# 「伊豆 歴史散歩」 ～南伊豆・西伊豆編～ 掲載内容

## 【河津町】

- No.4 谷津に残る伊豆最古の仏様 南禅寺(なぜんじ)「薬師如来坐像」
- No.5 河津が誇る無双力士 河津八幡神社「河津三郎 鍛錬の像」
- No.6 川端康成 第二の故郷 河津七滝(かわづななだる)「伊豆の踊子像」

## 【下田市】

- No.7 神様は海からやってきた！「白濱神社」
- No.8 南伊豆ジオパーク「柿崎弁天島 斜交層理」
- No.9 幕末維新の立役者「吉田松陰 史跡」
- No.10 幕末開国の資料箱「玉泉寺(ぎょくせんじ)」
- No.11 ペリー資料の宝庫「了仙寺(りょうせんじ)」

## 【南伊豆町】

- No.12 勇壮華麗「小稲(こいな)の虎舞」
- No.13 伊豆最南端「石室神社と石廊崎灯台」
- No.14 遭難者慰霊塔 海蔵寺「ニール号の碑」

## 【松崎町・西伊豆町】

- No.15 鋳絵(こてえ)の名工 入江長八「長八記念館と伊豆の長八美術館」
- No.16 重要文化財「旧岩科学校と鶴の間」
- No.17 感動の極彩色 東福寺本堂「五百羅漢像」
- No.18 西伊豆ジオパーク「堂ヶ島天窓洞と三四郎島のトンボロ」

## 【旧土肥町(現伊豆市)・旧戸田村(現沼津市)】

- No.19 歴史ファン必見「土肥金山」
- No.20 日露友好記念館「戸田造船郷土資料博物館」

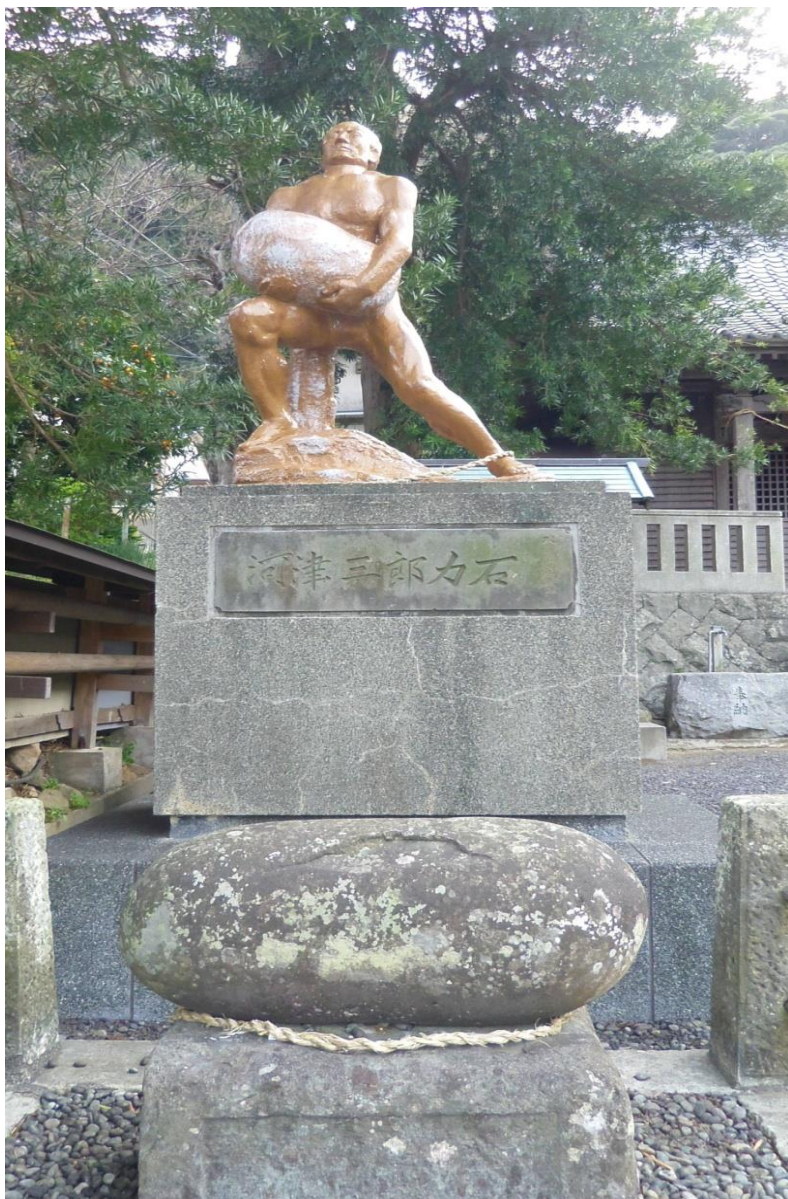
# 谷津に残る伊豆最古の仏様 南禅寺(なぜんじ)「薬師如来坐像」

歴史文化情報センター資料



- 南禅寺の開山は古く、奈良時代の行基(ぎょうき)上人が那蘭陀寺(ならんだじ)を創建したことに始まるとされます。
- 図の薬師如来坐像は、像高117.7cm 重量81.2kg、カヤの一木(いちぼく)造で、伊豆最古の仏像とされます。
- 一木造の技法や翻波式(ほんぱしき)の衣文(えもん)、奥行きのある堂々とした体軀(たいく)など平安前期の仏像の特徴を色濃く残しています。
- 中でも興味深いのは、釈迦三十二相のひとつである、「水かき」が、挙げた右手の指の間についていることです。(必見! 手足指縵網相=しゅそくしまんもうそう)
- 薬師如来とは、東方にある浄瑠璃世界に住む仏です。左手には薬壺(やっこ)を持ち、この霊薬で人々の病気を治し疫病の流行や天変地異など様々な災いを除いてくれる仏様として信仰されています。
- 「[南禅寺 リンク先:伊豆ならんだの里河津平安の仏像展示館](#)」

# 河津が誇る無双力士 河津八幡神社「河津三郎 鍛錬の像」 歴史文化情報センター資料



- 河津三郎祐泰(すけやす)は、伊東の領主伊東祐親(すけちか)の子、日本三大仇討の曾我十郎佑成(すけなり)五郎時致(ときむね)兄弟の父親です。
- 河津八幡神社には、河津三郎が身体を鍛えたと伝えられる「力石」が残っています。(図の手前の大きな石)
- 三郎は相撲の名手であり、相撲の四十八手のひとつ「河津掛け」の考案者とされ、三郎の菩提寺である伊東市の東林寺には相撲記念碑が建っています。
- 第34代横綱男女川(みなのがわ)と大関前田山が、河津巡業の時、この力石(重さ約320kg)を胸の高さまで持ち上げたと伝えられています。
- 「河津三郎鍛錬の像」は、河津出身の彫刻家、後藤白堂氏が制作しました。「河津三郎力石」の書には、昭和の大横綱、双葉山定吉の銘が残ります。
- [「河津八幡神社 リンク先:八ローナビ しずおかホームページ」](#)

# 川端康成 第二の故郷 河津七滝(かわづななだる)「伊豆の踊子像」

歴史文化情報センター資料



- 「道がつづら折りになって、いよいよ天城峠に近づいたと思うころ、雨脚が杉の密林を白く染めながら、すさまじい早さで麓から私を追って来た」
- これは「伊豆の踊子」の冒頭部分で美しい情景や今後起こる展開を暗示させる素晴らしい名文です。
- 伊豆の踊り子と書生の像は、河津七滝のひとつ、初景滝(しょけいだる)近くにあります。
- 「伊豆の踊子」は、大正11年に書かれた「湯ヶ島の思い出」という草稿から大正15年に踊子の思い出部分だけを作者が書き直したものです。
- 学生の頃この地に遊び、作家となつてからもこの河津に逗留して多くの作品を執筆しました。この河津は第二の故郷であると川端康成は語っています。
- 「伊豆の踊子像 リンク先:河津町観光協会」

# 神様は海からやってきた！「白濱神社」 歴史文化情報センター資料



- 白濱神社は、正式名称は「伊古奈比咩命(いこなひめのみこと)神社」といい、伊豆最古の宮とされます。社伝では、事代主命(ことしろぬしのみこと)三島大明神がこの地に鎮座され、その後となったのが地元賀茂族の伊古奈比咩命です。事代主命は後に伊豆の国府があった三島に移ったと伝えられます。
- 境内には右図の柏槇(ビヤクシン)の御神木がそびえ、天然記念物の青桐(アオギリ)が群生しています。毎年10月28日には、伊豆諸島の神々を迎える「火達(ひたち)祭」が行われます。29日には早朝から下田市指定無形文化財第1号の「三番艘」が奉納され、例大祭が執り行われます。翌30日には神々を送る「御幣(おんべい)流祭」が行われます。これらの神事は、白濱神社と伊豆諸島の神々との関係を物語る原初的な信仰を今に伝えています。
- [「白濱神社 リンク先:伊豆の国最古の宮 白濱神社ホームページ」](#)



- 伊豆半島の土台をなす地層は、海底火山の噴火による噴出物が堆積してできた地層で「白浜層群」と呼ばれています。白浜層群は、現在の伊豆よりも南にあった海底火山の噴出物で、フィリピン海プレートとともに北上し、本州との衝突にともなう隆起と浸食により地表に姿を現しました。
- 柿崎弁天島の地層も白浜層群の一部です。弁天島では縞模様が美しい、特徴的な地層が見られます。縞々の地層は、海底火山から噴出した火山灰や軽石が、波や海流によって運ばれてできた地層です。こうした地層が地殻変動によって隆起した後、波に削られてできたのが弁天島です。
- 斜めに交差する縞模様は斜交層理と呼ばれ、当時の海流の向きや水深を推定するヒントになります。この地層面上には生痕化石(せいこんかせき=貝などの生物が穴をほったり、這い回ったりした跡の化石)も観察できます。

※ 説明文は、伊豆半島ジオパーク推進協議会掲載許可済みです。

- [「柿崎弁天島 斜交層理」リンク先:伊豆半島ジオパークホームページ\(下田エリア\)](#)



# 幕末維新の立役者「吉田松陰 史跡」 下田市教育委員会生涯学習課所蔵資料



- 嘉永(かえい)7(1854)年3月、米国ペリー艦隊を追って下田に到着した吉田松陰と金子重輔は、米艦に便乗して海外密航の機会をうかがっていました。当時、皮膚病を患っていた松陰は温泉による治療のために蓮台寺を訪れ、偶然、村山行馬郎(ぎょうまろう)医師と懇意になり、しばらく村山邸に身を寄せました。左図は「吉田松陰寓寄処(ぐうきしょ)」であり、現在公開されています。
- [「吉田松陰寓寄処 リンク先:ハローナビしずおかホームページ」](#)
- 3月27日深夜、松陰らは柿崎の弁天島から小舟を漕ぎ出し、入港中の米艦ポーハタン号に接近乗船して渡米を願い出ました。松陰は海外の進んだ技術と制度を見聞するための渡航であると訴えましたが、ペリーは幕府との外交関係を考慮してこの申し出を断り、二人の密航は失敗に終わります。
- 松陰は松下村塾で幕末維新の志士を育てますが、安政の大獄に連座し刑死します。享年30歳でした。右図は、柿崎弁天島公園内にある「踏海の朝」像です。
- [「吉田松陰 リンク先:下田市ホームページ\(吉田松陰による『踏海の企て』\)」](#)

## 幕末開国の資料箱「玉泉寺(ぎょくせんじ)」歴史文化情報センター資料



- 嘉永7(1854)年3月、日米和親条約が締結され、下田開港が決まると玉泉寺はアメリカ人の休息所、埋葬所に指定されました。安政3(1856)年、タウンゼント＝ハリス米国総領事は通訳官ヒュースケンを伴い下田に着任しました。日米修好通商条約が締結されるまで、下田は幕末維新史の重要な舞台となりました。
- 左図本堂はハリスとヒュースケンの居室及び事務所として使用されました。境内にはロシア船ディアナ号水兵3名、ペリー艦隊将兵5名の墓があります。また、牛乳発祥の碑など興味深い石碑も残ります。併設されたハリス記念館では、ハリス愛用の遺品や当時の記録、「唐人お吉」との関わりを示す資料などが展示されています。
- [「玉泉寺 リンク先:開国の街下田 玉泉寺ホームページ」](#)

## ペリー資料の宝庫「了仙寺(りょうせんじ)」 了仙寺所蔵資料



- 日米和親条約締結後、米国使節ペリーと幕府全権の林大学頭(はやしだいがくのかみ)は条約の細則を決めるため了仙寺を会談の場とし、和親条約の付録13カ条(下田条約)を調印しました。(米国人の休息所、埋葬所、上陸場所などを規定)
- この会談が行われる前、右図「ペリー陸戦隊了仙寺調練の図(1856年)」のように了仙寺境内において、大砲や楽隊による観兵式並びに戦闘訓練の様子を披露するなど、ペリーは幕府に対して高圧的な態度に出ています。
- 一方「遊歩権」を認められた米国隊員たちは、下田の街を自由に歩き、庶民と交流しています。また、一般の町民を対象に行われたアメリカ海軍軍楽隊の演奏は、日本で最初の洋楽コンサートと伝えられています。
- [「了仙寺 リンク先:伊豆・下田国指定史跡 了仙寺ホームページ」](#)

## 勇壮華麗「小稲(こいな)の虎舞」 歴史文化情報センター資料



- 小稲の虎舞は、毎年旧暦8月14日の夜来宮神社の祭典として行われます。
- この虎舞は、近松門左衛門の代表作「国姓爺合戦」(こくせんやかっせん)の和藤内(わとうない)の虎退治を舞踏化したものと伝えられます。
- その日は満月の前夜にあたり、天候が良ければ小稲の浜には一段高い舞台が作られます。若者2人が虎の着ぐるみを着て、軽妙な舞や和藤内との激しい格闘シーンが一番の見所となります。
- 月の光の下、赤の衣に白い袴のいでたちで、手に御幣(ごへい)を持った和藤内が、大虎相手に勇壮な格闘の舞をして、「虎をやすやす従えてうれしやな息あるうちに、我が宅へ連れ帰る」と口上を述べて舞台を降ります。
- 平成16(2004)年「国の記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に指定されました。
- [「小稲の虎舞 リンク先:南伊豆町ホームページ」](#)

## 伊豆最南端「石室神社と石廊崎灯台」 歴史文化情報センター資料



- 左図「石室(いろう)神社」

石廊崎の断崖に臨んだ場所に、石室神社があります。大宝元(701)年の創建で役小角(えんのおずぬ)がこの地で修業したと伝えられます。疲れた小角が休んでいると、「この岬は実に難所だ。我を祭って守護を受けよ」と言う御神託を受け、現在の権現様(伊波例命=いわれのみこと)を祭ったという伝説が残っています。

- 右図「石廊崎灯台から神子元島(みこもとしま)灯台(左前方)を望む」

幕末に開国すると、欧米の船が日本に来航しました。夜間の安全航行のためには灯台が必要であり、英国公使パークスは下関事件の賠償金を使い、横浜から長崎まで8か所の灯台建設を提案しました。その一つが下田の神子元島灯台です。英国人R. H. ブラントの設計で、明治3(1870)年に完成し点灯されました。右の石廊崎灯台は翌年の明治4年8月に完成し、現在も海の安全に役立っています。

「石廊崎 [リンク先:ハローナビ](#) [しずおかホームページ](#)」

# 遭難者慰霊塔 海蔵寺「ニール号の碑」 歴史文化情報センター資料



- 明治7(1874)年3月20日未明、ニール号は南伊豆町入間(いるま)沖の三ツ石で暴風雨のため座礁し沈没しました。
- この船は、フランスのマルセイユ港の郵船会社の船で、長さ90m、幅8m、3本マストの大きな船でした。サマト船長以下90名が乗り込み、フランスを出発した後は香港を経由し、横浜港へ向かう途中でした。
- ニール号には、オーストリアの首都ウィーンで開かれた第1回万国博覧会に日本から出品された彫刻・刀剣・陶磁器などの貴重な文化財が積み込まれていました。
- この遭難事故での生存者はわずか4名。その他、行方不明者55名、31名の遺体は村人が海蔵寺に葬りました。
- 明治9(1876)年3月20日、フランスの大使館は遭難者31名(フランス人20名 中国人11名)の慰霊塔を建立し、その霊を慰めました。
- なお、ニール号沈没地点は、静岡県 の埋蔵文化財包蔵地(遺跡)に登録されています。
- 「ニール号の碑 [リンク先:ハローナビ しずおかホームページ](#)」

## 鏝絵(こてえ)の名工 入江長八 「長八記念館と伊豆の長八美術館」



- 左図『雲竜図』長八記念館所蔵資料

入江長八は松崎で生まれ、少年時代は浄感寺で学びました。19歳で江戸へ出て狩野派の絵を学びながら、彫塑(ちょうそ)と左官技術を応用し、独自の鏝絵を創始しました。鏝絵とは壁面に描かれる図様を漆喰(しっくい)等で盛り上げ、彩色を施したものです。浅草観音堂や成田不動尊、目黒祐天寺等に名作を残し、「鏝で伊豆長日本一」と讃えられました。

- 浄感寺本堂は、江戸時代の名人石田半兵衛が彫刻を担当し、長八が室内装飾を施し、弘化(こうか)2(1845)年に落成しています。本堂内陣天井の「八方睨みの龍」や欄間の「飛天」等の作品は、静岡県の有形文化財に指定されています。

- [「雲竜図 リンク先:松崎町観光協会ホームページ 長八記念館」](#)

- 右図「伊豆の長八美術館 エントランス」歴史文化情報センター資料

長八美術館は、左官の技術が随所にちりばめられ、「江戸と21世紀を融合させた建物」として、建築界の芥川賞といわれる「吉田五十八(いそや)賞」を受賞しました。館内には長八の作品約50点が展示されており、鏝絵の体験教室も長期休暇中に行われています。

- [「伊豆の長八美術館 リンク先:一般財団法人松崎町振興公社ホームページ」](#)

## 重要文化財「旧岩科学学校と鶴の間」 歴史文化情報センター資料



### ○ 左図「旧岩科学学校」

旧岩科学学校校舎は明治13(1880)年9月の完成です。建物正面の主屋2階にはバルコニーが設けられ、左右に副舎1棟ずつが張り出してコの字となり、外壁はなまこ壁で仕上げられています。この建築方法が洋風にも調和し、明治の和洋折衷の面影を今に美しく伝えています。なお正面玄関上の扁額(へんがく)『岩科学学校』の文字は、時の太政大臣三条実美(さねとみ)の手によります。校舎内には教室が復元され、学校教育資料や製糸資料等が展示されています。

### ○ 右図「岩科学学校 鶴の間」

この校舎には、鶴の間「千羽鶴」をはじめ、「美人賞蓮の図」「雲に鳳凰」「牡丹」などの饅絵が描かれています。特に鶴の間「床の間」は昇り太陽を表現した紅の壁、「脇床」には緑を配して松を表現しています。欄間には138羽の鶴が、昇る太陽(朝日)に向かって飛び立ち、鶴の表情も一羽一羽異なっています。入江長八66歳の作品です。

### ○ 「国指定重要文化財 岩科学学校 リンク先:一般財団法人松崎町振興公社ホームページ」





- 西伊豆町東福寺本堂の天井には、漆喰の五百羅漢像が描かれています。羅漢とは仏道の修行者、悟りを開くための修行僧のことです。天井画は四方に「天女」を配し中央にある「八方睨みの龍」をぐるりと囲む形で五百羅漢が立体的に描かれています。
- 施主は、西伊豆町出身の東福寺檀家で、東京神田で料理店を営んでいたそうです。御両親の冥福を祈るため、約90年前に本堂天井の鏝絵を依頼し、田村利光氏、通称のん兵衛安さん(孀山じゅざん)が4年8カ月の歳月をかけて完成させました。
- 田村利光氏は入江長八の弟子で、息子の田村恵稔(けいねん)氏と共に、仁科にある旧山田医院を宿所として制作にあたりました。現在、旧山田医院でも田村利光父子の鏝絵を見学することができます。
- [「東福寺 リンク先:西伊豆町観光協会ホームページ」](#)

# 西伊豆ジオパーク「堂ヶ島天窓洞(てんそうどう)と三四郎島のトンボロ」

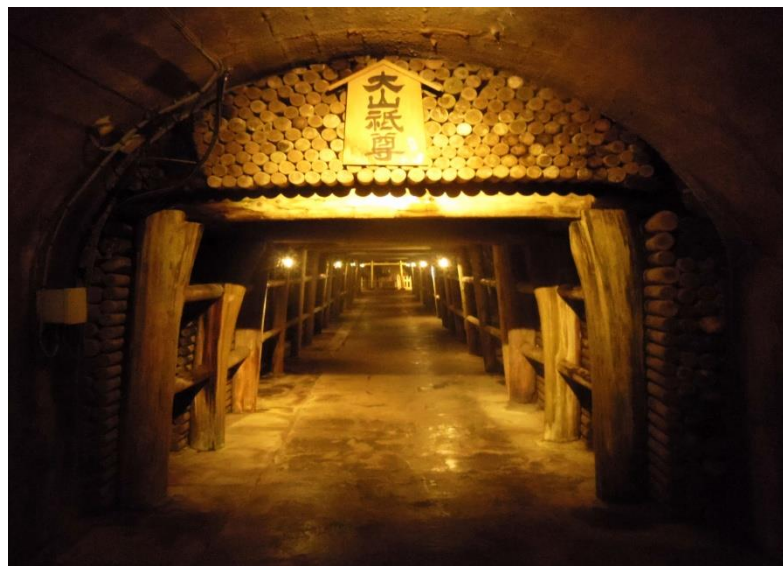
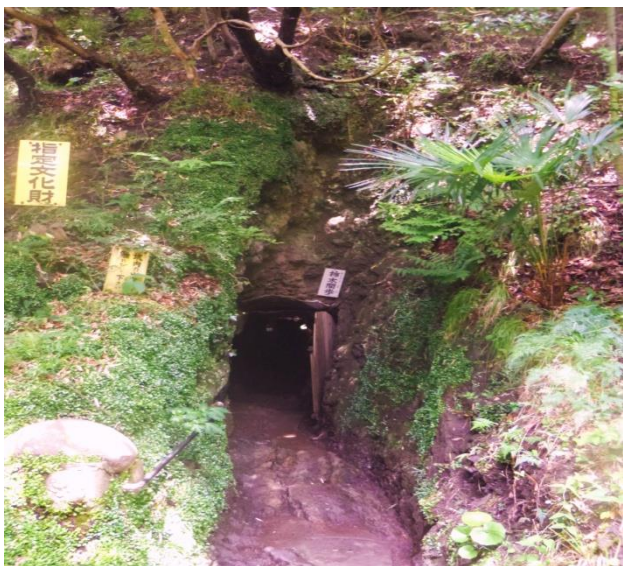
伊豆半島ジオパーク推進協議会所蔵資料



- 国の天然記念物に指定されている天窓洞(左図)は、長さ147mの海食洞窟(波の浸食によりできた洞窟)です。中央の天井が丸く抜け落ち、太陽光が光のカーテンのように降り注ぎエメラルド色の海面が神秘的です。その美しい景観は、遊覧船から楽しむことができます。
- 瀬浜海岸の三四郎島(右図)は、象島・中ノ島・高島からなる島で、角度により3つにも4つにも見えることから三四郎島と呼ばれています。三四郎島では、マグマが冷えて固まる際にできる柱状節理(ちゅうじょうせつり)が見られ、島のひとつ「象島」では、柱状節理の様子が本物の象のように見えます。
- 源平の頃、島に隠れ住んだ源氏の若武者三四郎に会いに、引き潮の時に現れる瀬を歩いて恋人が渡ったという伝説が残ります。この伝説の元は、トンボロ=陸繋砂州(りくけいさす)という自然地形で、干潮時に幅約30mの砂州が現れ、写真のように島と陸続きになります。

※ 画像と説明文は、伊豆半島ジオパーク推進協議会掲載許可済みです。

- [「天窓洞と三四郎島のトンボロ リンク先:伊豆半島ジオパークホームページ\(西伊豆エリア\)」](#)



- 左図は、「龕附(がんつき)天正(てんしょう)金鉱 柿木間歩(かきのきまぶ)入口」です。龕とは、石窟や家屋の壁に仏像・仏具を納めるために設けたくぼみのことです。土肥金山開発の歴史は、天正5(1577)年から始まります。現在でも当時の坑道が100mにわたって残り、ガイドの説明を聞きながら、坑内を見学することができます。当時の手掘りの跡がはっきりと確認できる坑道で、歴史ファンには特にお勧めの場所です。
- [「龕付天正金鉱 リンク先:伊豆市役所観光経済部観光交流課ホームページ」](#)
- 右図は、土肥金山の観光坑道です。土肥金山は江戸時代には徳川幕府の直轄となり金山奉行大久保長安(ながやす)の時代に大いに発展します。長安は甲州武田氏の黒川金山衆、今川氏の富士金山衆らを使い、横堀法・水抜法などの新しい技術を駆使して生産量を上げました。
- 伊豆には土肥のほかに、瓜生野(うりうの)金山、湯ヶ島金山、縄地(なわぢ)金山などが開発され、多くの金銀を産出し、江戸初期の財政を賄う役割を果たしました。
- [「土肥金山 リンク先:ハローナビ しずおかホームページ」](#)



- 安政元(1854)年ロシア使節プチャーチン(右図)は下田に入港し、条約交渉中の11月4日安政の大地震に遭い、乗艦ディアナ号は津波により大破しました。ディアナ号は西伊豆の戸田(へだ)で修理することになりますが、下田からの回航中、暴風雨のため田子の浦沖で沈没してしまいます。
- その後は戸田において、ロシア人指導のもと、伊豆の船大工と協力して、総長25m、最大幅約7m、重量約100トンのスクーナ船を完成させました。左図3本マストの洋式帆船へダ号です。この船でプチャーチンはロシアに帰国しました。
- 戸田港入口の御浜岬(みはまざき)に、沼津市戸田造船郷土資料博物館があります。ここには、幕末この地で建造されたへダ号造船当時の設計図や、関連資料が多数展示されています。また、造船作業が行われた牛ヶ洞(うしがほら)には造艦碑が立ち、プチャーチンの宿所となった宝仙寺(ほうせんじ)にはロシア人水兵の墓も残っています。西伊豆の隠れた歴史名所となっています。
- [「戸田造船郷土資料博物館 リンク先:沼津市ホームページ」](#)